

郷土史への扉

シリーズ大隅国を知る ⑥

隼人の抵抗 ②

前回は、隼人の人々がなぜ朝廷に抵抗しなければならなかったのかについて述べましたが、今回は一年数か月に及ぶ戦いの様子と場所（山城）について紹介します。

一 隼人の戦いの経緯

隼人の抵抗については、「続日本紀」に部分的に記されていますが、要約すると次のようになります。

- ◎養老四（720）年二月、隼人が反いて大隅国守陽侯史麻呂を殺した。
- ◎養老四年三月、大伴旅人を征隼人大将軍として隼人討伐を命じた。
- ◎養老四年八月、大伴旅人の帰京を命じ、副将軍以下は現地に留めた。
- ◎養老五年七月、副将軍が帰京した。斬首並びに捕虜とした者千四百人余り。
- ◎養老六年四月、戦功をあげた者に勲位を与えた。
- ◎養老七年五月、大隅・薩摩の民六百二十四人が朝廷に出向き貢物を贈った。

た。天皇が隼人を歓迎し、族長三十人に官位と禄を与えた。

◎養老七年六月、隼人は帰郷した。このように、隼人の抵抗は苛烈を極め、一年以上続きましたが、養老四年八月に大伴旅人を帰京させたことから戦いの大勢は決したようです。

これは、大分県宇佐八幡宮に伝わる「八幡宇佐宮御託宣集」の中に、「隼人は大隅・日向国に七か所の城を構えていた。最初に五か所の城が落ちたが、曾於之石城・比売乃城は堅固でなかなか落ちなかった」と記されており、広範囲で抵抗していた隼人軍を、二つの城を残して、打ち滅ぼしていったことがうかがえます。

二 七つの城

先月号でも述べましたが、一万人を超す朝廷軍に対して、隼人側は民衆を合わせて数千人規模だったにもかかわらず、一年数か月に及ぶ長い間、抵抗し続けられたのは、堅固な城があった

ためだと思われる。

「八幡宇佐宮御託宣集」の中には、奴久良・幸原・神野・牛屎・志加牟・曾於之石城・比売乃城の七つの城名が記されています。このうちの曾於之石城は国分の城山公園（隼人城）で、比売乃城は姫木城と思われませんが、そのほかの城については、はっきりしていません。いずれも非常に険しい地形を生かした山城だったと思われれます。

三 曾於之石城と比売乃城

では、最後まで抵抗した「曾於之石城・比売乃城」とはどのような山城だったのでしょうか。

曾於乃石城（隼人城）は、国分市街地の北側にあり、山頂部は標高一九二メートルで、わりあい平坦部になっていますが、周囲は険しい垂直の絶壁で囲まれており容易に攻めることが難しい天然の要害となっています。城内には数か所の湧水地があり、籠城で欠かすことのできない水にも恵まれていました。

また、断崖の岩をくりぬいて造った搦手門（裏門）の跡が残っており、堅固な城であったことを示しています。

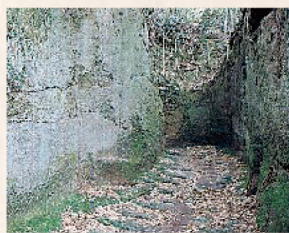
一方、比売乃城（姫木城）は、国分平野の中央北側にあり、標高一七〇メートル、最大幅約二〇〇メートル、長さ約一〇〇メートルの細長い山城で、曾於之石城と同様に周囲は険しい垂直の絶壁で囲まれています。山頂部の平坦地は狭く起伏が多いのが特徴で、南端部に一際高い国司岳がそびえ、眼下に大隅国府や国分平野を一望する山城です。

隼人軍はこの二つの山城で最後まで朝廷軍を迎えて戦いました。隼人の人たちは、切り立った絶壁に守られながら激しく抵抗し、遠征軍を苦しめたことでしょう。また、両方の山城は遠望することができ、苦しい時はお互いに狼煙や旗などで励まし合い、最後まで戦い抜いたのではないのでしょうか。隼人の抵抗のあとの様子については次回紹介します。

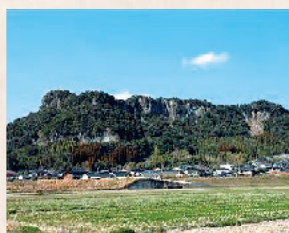
（文責 川俣）



曾於之石城（隼人城）



隼人城搦手門



比売乃城（姫木城）